

## 差別への怒り

中学卒業後、進学を目指すも家庭の経済状況から断念し、幌別村役場に勤務することになりました。しかし、しばらくして役場を辞めていきます。これは、自分の戸籍に『旧土人』と書かれているのを見て、その差別に怒りを感じたためとも言われています。

そのころ、真志保の恩師となる著名なアイヌ語研究者である金田一京助と出会い、進学のための援助を受けることになりました。



▲1930（昭和5）年、21歳。真志保（右）と義弟の佐藤三次郎（左）。幌別本町にて。

## アイヌ語研究への道

1930（昭和5）年、第一高等学校（現在の東京大学教養学部）に優秀な成績で入学し、その後、東京帝国大学（現在の東京大学）に進み、本格的なアイヌ語研究の道を歩みはじめます。この大学時代に初めての心臓発作が起き、ここから終生心臓との戦いが続きます。

1936（昭和11）年には、卒業論文として執筆した『アイヌ語法概説』が、恩師の金田一京助との共著という形で出版されます。このようなことは極めてまれであり、その天才的な才能を早くも示しました。

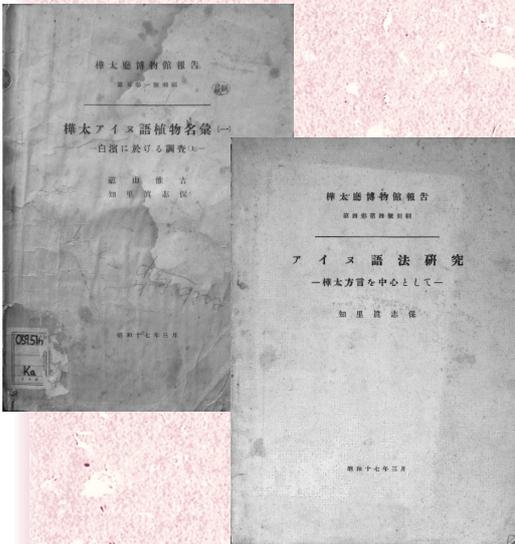


▲1934（昭和9）年、25歳。東京帝国大学2年生。東京都文京区弥生地区にあった羽子館2階の下宿部屋。

## 樺太へ

大学院中退後、中学校の恩師の呼び掛けで、樺太庁（現在のサハリン）豊原高等女学校に教師として着任しました。同時に、樺太庁博物館の嘱託となり、博士号取得の論文となった『アイヌ語法研究』を書くなど、ここでの経験がその後の研究に大きな役割を果たすこととなります。

学校での真志保は、当時の教え子たちの記憶から、厳しいながらも、とても思いやりのある教師だったようです。冬休みに帰省できない生徒を自宅に招き、食事をごちそうし、トランプなどのゲームで寂しさを和らげてあげたこともあったそうです。しかし、3年後には、体調不良と太平洋戦争の状況悪化から教師を辞め、登別へ帰郷します。



▲『アイヌ語法研究-樺太方言を中心として-』（右下）と『樺太アイヌ語植物名彙-白濱に於ける調査-』（左上）。『アイヌ語法研究』は、1954（昭和29）年に博士論文として提出されました。博士論文には、樺太時代の研究が中心となっており、真志保の研究において樺太が重要であります。